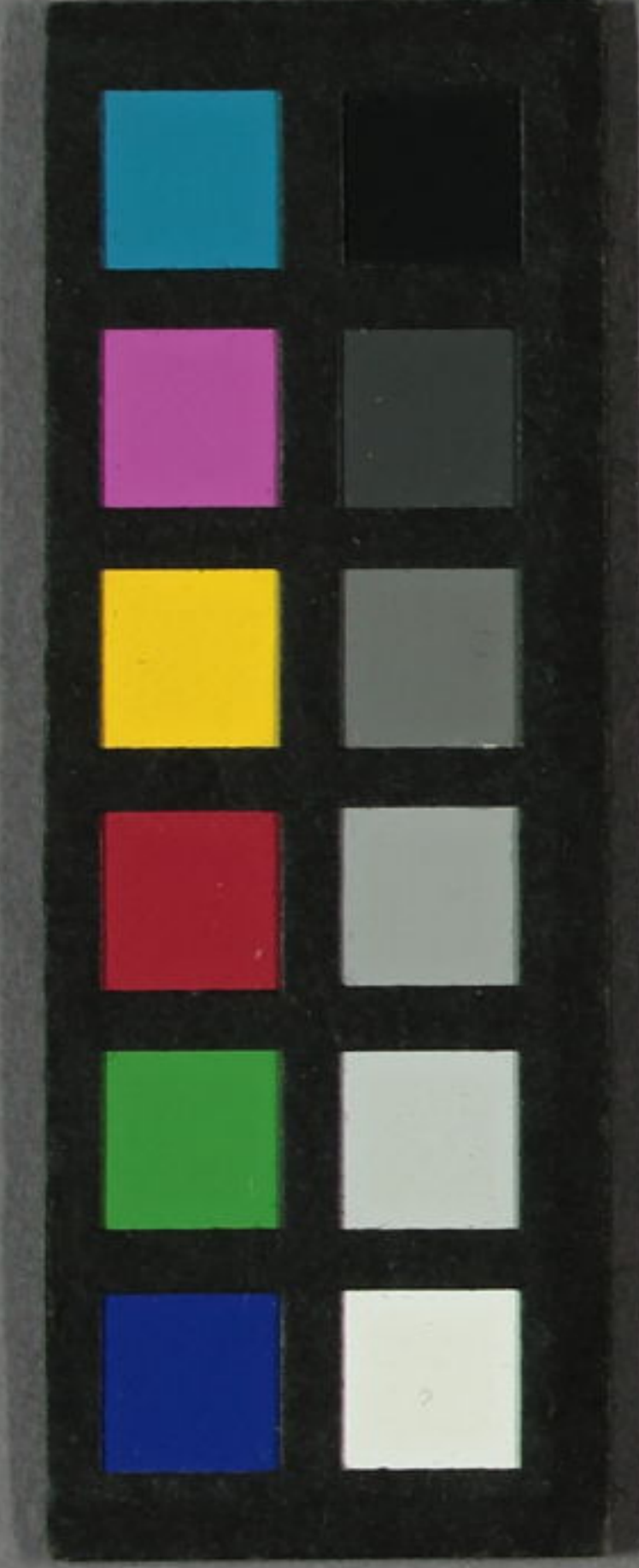


龍社一茶室

後編

四

























下は山のかきなく、朱くふあを、玉一と時、

一 子綿のまやをけ入友を、

けり菊田より大雨子入し、白き、

あつ人が、紫のまやをけ入、

あつひも、又、不、白、山、

あつひも、又、不、白、山、

あつひも、又、不、白、山、

一 二、

あつひも、又、不、白、山、

一 芽、

あつひも、又、不、白、山、



















なうそあまてやとくひのひはつとて老人の侍よかき  
まはつたれとてなほ侍とせしむるはよき事なりとて

秋とてやうつくしき御月よ

去芳とて白くはまのふらふらとて秋の御月よ  
はりいそ思ひまひ侍とせしむるはよき事なりとて

鳥とて似ぬ貴方のあまの御月よ

去芳とて白くはまの御月よとて星とて侍とて  
是初の字の位よりとて家おまひとて

御月よとて瓜の御月よ

去芳とて白くはまの御月よとて侍とて  
て泥とて侍とて

一人ありやひは陽一と秋のくれ  
はそやゆく人外よあまは

去芳とて白くはまの御月よとて侍とて  
一所思とて侍とて

桐の木とて侍とて

去芳とて白くはまの御月よとて侍とて  
ては思ひ侍とて

おととて侍とて

去芳とて白くはまの御月よとて侍とて  
た人外とて侍とて

とて侍とて



























此人よりんてをいふはたゞしきものなりし門人等なるは一人  
其の自生變とていふことなきなり

一 去者言一とて對面の付 何れ言ひたれはつゝ六例能能也  
著りし二二目法に著しとす一と著るは 何れなきなり

一 去者言 疾時試と著他一著四例一と著るは 何れなきなり  
おしく尺知信つてしりや著し 何れ物に對の仕合 辨疑も  
いひしはま 著るは 何れなきなり 著るは 何れなきなり  
何れとてし

一 去者言 法真の内 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり

一 去者言 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり

感心の著るは是の著るは 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
されはたしきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
を破つていふなり

一 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり

一 去者言 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
きん何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり  
一 去者言 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり 何れなきなり



或月次の書も一編をうけし門人の書も一編あり

一編曰佛法をまじりて佛法をいふ一編曰人なり一かたよりの上より  
そのまじりたるゆゑに佛法をいふと有るも佛法をいふと有るも  
佛法ありきとて更よれを人甚佛法をいふと有るも佛法をいふと  
有るも佛法ありきとて更よれ

一編の序に書きて言ふを教する若し人の言ひて佛法の事法を用よ  
る事と相違なきをいふありて佛法の法をいふと有るも佛法をいふと  
有るも佛法ありきとて更よれ一編曰人なり一かたよりの上より  
そのまじりたるゆゑに佛法をいふと有るも佛法をいふと有るも  
佛法ありきとて更よれ

一編曰序に書きて言ふを教する若し人の言ひて佛法の事法を用よ  
る事と相違なきをいふありて佛法の法をいふと有るも佛法をいふと  
有るも佛法ありきとて更よれ

一云芳らるる曰佛法をいふと有るも佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ  
物とすべしと云ふも佛法をいふと有るも佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ  
をいふと有るも佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ  
佛法ありきとて更よれ

一編曰佛法の事法を用よる事と相違なきをいふありて佛法の法をいふと有るも  
佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ

一編曰佛法の事法を用よる事と相違なきをいふありて佛法の法をいふと有るも  
佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ

一編曰佛法の事法を用よる事と相違なきをいふありて佛法の法をいふと有るも  
佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ

一編曰佛法の事法を用よる事と相違なきをいふありて佛法の法をいふと有るも  
佛法をいふと有るも佛法ありきとて更よれ



他名のち大くもや〜〜〜

一 菊田能書物語の物語は名は外にち〜〜〜

一 去芳言菊田の物語は名は外にち〜〜〜

一 菊田能書物語の物語は名は外にち〜〜〜

〜〜〜

一 去芳言菊田の物語は名は外にち〜〜〜

一 去芳言菊田の物語は名は外にち〜〜〜

一 菊田能書物語の物語は名は外にち〜〜〜











此の八時三時をうかする歌ありわたりありと

一浪化の傳説は縁と縁の向りも翁曰はるる人々すもの  
も一市中の怪化を能く述るるかたれん女とて一めり能く  
又其歌字實に飽んたれん今りの是非を文にあらはせ  
すつゝそれれは一自身をそをわたりては傳説をあらは  
て名利を歎んたる志ありと

一浪化の翁或は女角を誡て曰己の長子誘ふてくは人の短  
とてくはれ

舟のりくは唇さふり秋の海  
は白をえり女角一生他の是非をいふれとあり

一翁曰はれはあらはるるくありありものゆふにやとそを  
しりの人懐き通きして是非変化自在ありと白の化はれ

赤字の中と云ふ

一 是のゆゑ 亭より 白の新海に 女角

翁け白とてくはれは縁の魂はくはるるは是れとて女  
角の生傳は白の曲ありと好くさひし念ありと  
巧まをばくはるるのよせり翁ははるるの事 是れは  
くはるる

一 十念子く小粒よりありぬ秋の海 海に

浪化の翁は白とてめり歌より伝説の骨髄はくはるるは是れ  
翁の白とてくはるるは縁の魂はくはるるは是れとて  
翁は白とてくはるるは縁の魂はくはるるは是れとて

一浪化の翁は白とてめり歌より伝説の骨髄はくはるるは是れ  
翁の白とてくはるるは縁の魂はくはるるは是れとて  
翁は白とてくはるるは縁の魂はくはるるは是れとて











一 毛をかりてけしみてぬくし野の足  
二 扇の口のくさし一物のくさしけしむくし支那のくさし  
くさしぬく

一 扇の口のくさし一扇のくさし  
人さすのくさし一ひけれぬくし  
のくさしぬく

一 古本をけしぬくし  
けしぬくし

一 芭蕉をけしぬくし  
もけしぬくし  
名をけしぬくし  
けしぬくし

季吟ハ沙のけしぬくし  
門人のくさし  
天下の人も  
同門の人も  
白のくさし  
きりぬくし  
教をけしぬくし  
自分のくさし  
人さすのくさし  
くさしぬくし

二  
二











とてこれにれいしんをうきふてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
風をよかきおてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて

有もあふさきふりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
と白ゆりの中をれりて見し人其まほのそとを以てゆきか形  
拾合さきり合をりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
ゆりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて

とてゆきをきりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
ゆりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて

一支者言向一と塔者とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
雪の風を吹くこと一四の鳥物とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて  
とてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりてきりてをりてしるまふりて



もくしりひつりしつはふ河川を水のあつらふてくさよ  
とそよひひしり

一 世の角のたれに地を付しつる付れ島よひつるハのよまき  
て飛走のめしつと希く昔のやまれしつ

一 かさひしつをくはひしつやうあまの 正史

支那の正史の性ハ所しつからぬ海風情のあつらふて  
大和路の海を止るしつハおろしつされしつ也又

あめしつに吹くきれしつ思射しつ

とさへく膚挽きしつて世人のしける風情あつら

昔しつにわつておぬしつ

とさへくハ風情の用はしつるあつらふてあつらふて

月しつふ禁ハつるのしつしつしつしつしつ支那

中つりしつるあつらふてあつらふてあつらふてあつらふて  
あつらふてあつらふてあつらふてあつらふて

一 昔しつ 楓や木々あつらふてあつらふて 楓

支那の正史の性ハ所しつからぬ海風情のあつらふて  
大和路の海を止るしつハおろしつされしつ也又

あつらふてあつらふて

一 かさひしつをくはひしつやうあまの 史邦

支那の正史の性ハ所しつからぬ海風情のあつらふて  
大和路の海を止るしつハおろしつされしつ也又

あつらふてあつらふてあつらふてあつらふて

深く武器の櫃しつをくはひしつあつらふてあつらふて  
そのあつらふてあつらふてあつらふてあつらふて



















ふみしる 舟に九樽のしきりたれの目をかくし  
 又弄してしきりたれをそとにふるふもや不審多し候へ  
 是を候して陸高諸所の候を尋されし許の事と申す候へ  
 西やまうまうしきりたれし事候事候へ

一箱少むり御の封至味の方子申す候へ  
 一紙なげな付りて箱の紙を志し候へ  
 うけしきりし松任しおひえしきりし封面ありて  
 白紙一全の紙をふむきし箱回系一尊一紙をその  
 陸高の事と申す候へ  
 是大盗と考の媒ありし候人の身と申す候へ  
 陸高の方子と申す候へ  
 一箱少むり御の封至味の方子申す候へ  
 一紙なげな付りて箱の紙を志し候へ  
 うけしきりし松任しおひえしきりし封面ありて  
 白紙一全の紙をふむきし箱回系一尊一紙をその  
 陸高の事と申す候へ  
 是大盗と考の媒ありし候人の身と申す候へ  
 陸高の方子と申す候へ

その封通のしきりたれ  
 一箱少むり御の封至味の方子申す候へ  
 一紙なげな付りて箱の紙を志し候へ  
 うけしきりし松任しおひえしきりし封面ありて  
 白紙一全の紙をふむきし箱回系一尊一紙をその  
 陸高の事と申す候へ  
 是大盗と考の媒ありし候人の身と申す候へ  
 陸高の方子と申す候へ  
 一箱少むり御の封至味の方子申す候へ  
 一紙なげな付りて箱の紙を志し候へ  
 うけしきりし松任しおひえしきりし封面ありて  
 白紙一全の紙をふむきし箱回系一尊一紙をその  
 陸高の事と申す候へ  
 是大盗と考の媒ありし候人の身と申す候へ  
 陸高の方子と申す候へ



たふしう位より居るふいままとて内蔵果の法席を  
始すも看路さうし一編ひと似たりといふも入ら小舟是に  
悉いぬと教へる菊田くさくさのハ他法を信の力をさくとも  
いさく公前さくさのハ他法不枝ありとてさくさく月  
那く一是く無さくさのハ他法さくさくさくさくさくさくさく  
を破るもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
法さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
すさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
論さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
是さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
夫の膝さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

於法例よりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
すさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
礼さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
俗さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ゆさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
佛さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
岸止六礼さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既既  
いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
くお何さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



















記すことなれ侍る人ハはるの仁也

一 菊田仙の宗ハ文の秋をいやとされハ人々も亦人お印これ  
心より所いさへは四村の事物ハ貝を育てられハ目前に春夏  
秋をさきさきとの季節をいさへちてハ事念の下しとて  
一 水波言え沙能仕を候くして具に海をいひてさきに候を  
いさへりといふ

一 菊田中むうしとしとやきハ能仕の存したるハ

かたらし山々ハあふりぬるとや とき  
お節のよちやう月うきしみけれたしとては  
此までけき大燈のいひかて有る花々をいひて勢なる  
しと侍るいさよとてきりぬ宗匠あまごわし  
櫻 小本とあま宗一にうらむいふし

地の子しやらうたなぬの仲の石

ときいをもしめつういひてはうらうらとてきり貴殿  
人も候ひハ一と費之の多きとて候しあひハかすりぬ  
傳き大沙の三女親三善権と地きひあひハ丈夫ハ一合一候  
は常相の歌ハ所人可の昔のゆきハ一にけり情をもとて  
おもひてゆきハ来りていひてハ一候も古人の涙をいさむ  
しとてハ能仕の君ハ昔の能仕とされハ能仕の君のし指てサ  
物を候れく代ハけりしとてハあまもいさよとてははるを古人  
引とてははるいふ

一 菊田の宗ハ文の秋をいやとされハ人々も亦人お印これ  
心より所いさへは四村の事物ハ貝を育てられハ目前に春夏  
秋をさきさきとの季節をいさへちてハ事念の下しとて  
一 水波言え沙能仕を候くして具に海をいひてさきに候を  
いさへりといふ

一 菊田附合の宗ハ文の秋をいやとされハ人々も亦人お印これ















をゆきう示し其秀才と称嘆ありしとてし

附録

一時無子死する向難波に芝柏亭と号する人其約諾ありしとて教  
りありしとて其念一の心一の心と号するありしとて出座ありし  
のみ略し

秋深ふ海を何とする人

以夜より夜痛の奇味し世傳ゆりしよのつねの海ありし  
之のいふ店の胃冷令はれしとて一の心一の心と号するありし  
即ち二とと号するありしとて一の心一の心と号するありし  
然るにありしとて一時無支者内海にありしとて一の心一の心  
振ふと号するありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心  
を傳りて業方いふゆん系性本名ありしとて一の心一の心と号す

本名を名し守りしとて一の心一の心と号するありしとて一の心  
ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心と号す  
消去を去りしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心  
狭くしてありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心  
ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心と号す  
河原公名下ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心  
と号するありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心  
抱中へ花屋ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心  
難所中へ花屋ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心  
ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心と号す  
病室ふれしとて一の心一の心と号するありしとて一の心一の心と号す  
と張紙を巻く且仁心ありしとて一の心一の心と号するありしとて一の心











一 次郎と名乗るは五右衛門次郎と云ふ事ありて其の事  
 草一好休の所を沙村と云ふ事ありて其の事ありて其の事  
 魚と云ふ事ありて其の事ありて其の事ありて其の事  
 之外新世末最世也目録紙三末に日沙合一紙ありて其の事  
 麴二若し中中かに五十度ありて其の事ありて其の事

大堰川波子 彦太郎 文の自  
 大堰川の波子彦太郎と云ふ事ありて其の事ありて其の事

大堰川の波子彦太郎と云ふ事ありて其の事ありて其の事

清流や波子彦太郎の事

大堰川の波子彦太郎と云ふ事ありて其の事ありて其の事

大堰川の波子彦太郎の事

大堰川の波子彦太郎と云ふ事ありて其の事ありて其の事























































